

## 15 当センターにおける抗酸菌の分離状況と薬剤感受性試験について

○尾高郁子 里村秀行 菅野ななみ(千葉県がんセンター)

【目的】当センターでは感染症の検査に加えて腫瘍との鑑別のために抗酸菌検査が依頼される。その検出状況と感受性試験結果について報告する。

【方法】検出状況は2000～2005年の依頼検体について、感受性試験は1999年6月～2006年8月までの検出菌についてまとめた。培地は工藤PD培地(日本BCG)、MGIT(BD)、同定はコバスアンプリコア(ロシュ)、DDHマイコバクテリア(極東)、感受性はウエルパック培地A,B,P,S(日本BCG)を使用した。

【結果】総検体数4043、抗酸菌陽性件数184、陽性率4.6%で、年別で陽性率の増減の傾向は認められなかった。症例数は全体で139、*M. tuberculosis*(MT)42、*M. avium*(MA)54、*M. intracellulare*(MI)14、*M. kansasii*(MK)3、その他26であった。年別の症例割合では特定菌種の増減傾向は認められなかった。塗抹陽性件数は全体で72、MT29、MA27、MI5、MK2その他9であった。細菌学的診断基準を満たす症例数は全体で59、MT42、MA13、MI1、MK2、*M. fortuitum*(MF)1で4人に1人はNTM(非結核性抗酸菌)であった。そのうちMFを除く58症例の性別はMT男:女27:15、MA3:10、MI1:0、MK2:0でMA以外は男性が多かった。58症例の年齢分布はMTは20～80代に分布し、MAは60、70代に多く、MIは70代、MKは50代であった。感受性試験ではMTは培地P,SでSM,PZAを除く各薬剤に対し90%以上の感受性率を示し、多剤耐性結核は認められなかった。

【考察】分離率に増加傾向は認められていないが、当センターでも4人に1人はNTMであり、今後もNTMの割合は増えていくことが予想される。臨床医からの依頼によりNTMについてもMT用の感受性試験で検査を行っているが、意義ある感受性検査にするためにもNTMに対する感受性試験方法の確立が望まれる。

043-264-5431

## 16 平成18年度千臨技微生物検査精度管理—結果報告日・グラム染色—

○宮部安規子(千葉大学病院) 伊東高広(千葉社会保険病院) 石川恵子(浦安市川市民病院) 中沢武司(順天堂浦安病院) 高橋弘志(君津中央病院)

【目的】微生物検査の中でもグラム染色は迅速検査として意義が高い。今回は染色形態と患者情報で菌種の推定ができるムコイド型緑膿菌を使用し、各施設における中間報告に要する日数と結果について調査、評価した。

【方法】喀痰を直接塗抹したスライドガラスを試料として各施設に送付し、返却された染色後の標本を精度管理委員4名で評価した。報告日は検査開始日時から起算してFAX受信日時により評価した。

【評価方法】①中間報告日:A評価-検査開始日時から24時間以内、B評価-検査開始日時から24～48時間、C評価-それ以降。②菌体の染色性評価:A評価-染色良好(80%以上)、B評価-やや不良(50～80%)、C評価-不良(50%未満)。③染色標本バックグラウンドの明瞭性評価:A評価-きれい、B評価-やや汚い、C評価-汚い。④推定菌評価:A評価-*P. aeruginosa*、B評価-*K. pneumoniae*、C評価-その他の菌

【結果】参加41施設中①FAX報告日:A評価33施設(80.5%)、B評価6施設(14.6%)、C評価2施設(4.9%)。②菌体の染色性評価:A評価41施設(100%)③染色標本バックグラウンドの明瞭性評価:A評価37施設(90.2%)、B評価4施設(9.8%)。④推定菌評価:A評価36施設(87.8%)、B評価3施設(7.3%)、C評価2施設(4.9%)であった。

【まとめ】中間報告については、検査開始後速やかに何らかの結果を報告することが望ましいと考える。グラム染色における菌体の染色性、標本バックグラウンドは良好な結果が得られた。グラム染色の報告には染色所見と患者情報を総合して判断し、迅速かつ正確な結果の報告を目指すことを期待する。

043-222-7171 (内線6211)